大学版画学会 会報 17

1988. 9

大学版画学会
17
会報
1988.9

▶12回回大学版画展に

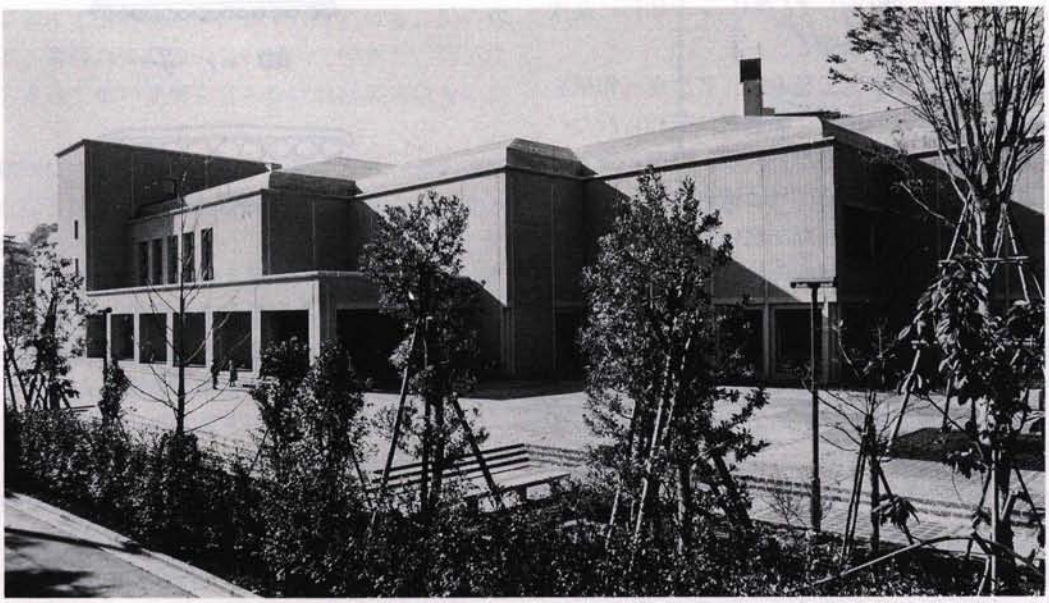
吹田文明

1987年4月、町田国際版画美術館がオープンした。版画関係者が等しく願っていた公立版画美術館誕生である。新しく出発する学会の第12回大学版画展を学会と美術館の共催で開くことになった。持論、学会の総会、研究発表も美術館で開くことになる。これは美術館の企画時から参画した中林委員のご努力による所であらためて感謝申し上たい。

現在66大学と150名の会員となった、大学版画学会として相応しい展示会場であり、発表、総会の場と言える、この期会に展覧会にのみ力を入れて来た学会を本来の研究発表にも力を入れるようこころみていただきたい、単に文章発表のみでなく、実技による発表もお願いしたい、又美術館側も期待しているように一般市民とのふれあいの楽のしいイベントが出来ると良い、町田市内での学生による版画の講習会、展示場での解説や版画の話し実演等。もともと、版画は大衆のものであり、一般への普及は学会の目的でもあります、良り多くの方々への版画の普及と理解が美術教育に於ける版画のあり方を明確にしてくれるものと思う山本鼎を始め多くの先輩が創作版画以来努力を重ねて来た主唱も又そこにある。第1回の共催で果してどの程度の成果を得られるか不安であり、一度に多くを期待出来ないが、日本版画の拠点として、公的な核が出来たのだから、漸次年月と共に骨が出来、肉が着き美術館も学会も大きな発展を得ることと確信している。

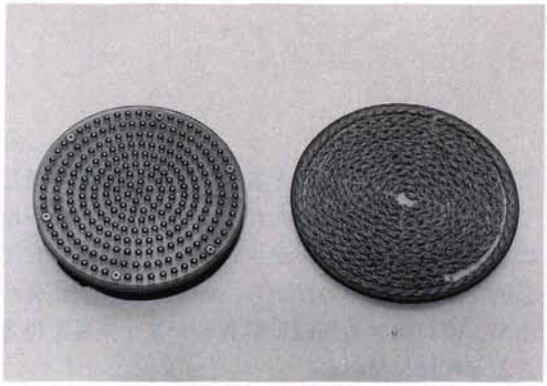
創作版画以来、現代版画の種を蒔き、理想に努力し続けた先輩達の努力と意欲を思う時、我れ我れも一益の継続努力をしなければと思う次第です。

追記　原稿を書き終った所へ韓国弘益大学の徐承元先生より弘益大学の学生作品30点が着いた、町田国際版画美術館での第1回展を長年の懸願であった韓国との交流展にすべく努力して来たが、韓国大学版画学会結成が間に合わず弘益大学のみとなったことは大変残念ではあるがこのことによって、韓国大学版画学会の結成を見ることが出来れば大変幸である。次会はぜひ韓国大学版画学会との交流展を期待して止まない、又、韓国との交流展の為めにご努力いただき12回展に花をそえて下さった弘益大学の徐承元先生にあらためてお礼を申し上たい。

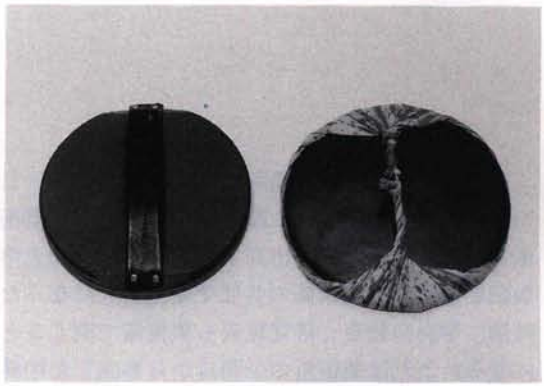


町田市立国際版画美術館

▶ボールバレンの研究



左よりボールバレン・本バレン



左よりボールバレン・本バレン

「バレン・プレス・ボールバレン」

由木　礼

著者がボールバレンを開発したのは、一にも二にも「ツブシ刷り」（広い面を均一に刷ること）の重労働を軽減する道具を求めたからであって、発想も原理もいわゆるバレンとは無縁のところから出発した。その経緯は既に「版画館」第15号に発表したのでここには繰り返さない。ところが、試行錯誤のはてに辿りついた結果は、あたかも始めからバレンの改良を意図したものの如く、原理も形状もバレンと重なり合っているのに驚く。これは、木版の刷道具として、バレンが如何に高度の完成品であるかを物語る。

バレンの原理を考えて見ると、アテ皮（和紙を貼り固めた衾蓋）の中に、渦巻状に収められたバレン縄（竹の皮に包まれた芯）が、適度の弾力を持った無数の突起点を平面状に構成する、というところにある。この突起点が無いと、上からの力は全平面に分散して、版木の絵具を紙に刷りとる充分な機能を果さない。

図1に示したのは本バレンを模式化した断面図であるが、これで分かるように、バレン縄が太い程、突起点の数は減り、そのぶんだけ上からの各点当りの圧力は強くなる。バレンは通常四条のセンイ（竹の皮を裂いたもの）を捻った四ッ子縄、それを二本合わせた八ッ子、更に八ッ子二本を捻り合わせた十六子と、三種類があり、最も太い十六子が「鬼バレン」とも呼ばれて「ツブシ」専用に使われる。ところがこの「鬼バレン」を以ってしても広い面を均一に刷ることはたいへんな力を必要とする。というのは、上から圧す力が強ければ強いほど、紙を擦る、つまりバレンを横に動かそうとする力は妨害される。いうなればブレーキとアクセルを同時に踏むようなもので、結果、竹の皮が直く擦り切れてしまう。そして、このバレンを包み直す作業が一仕事なのである。

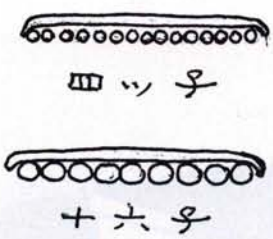


図1

ボールバレンの原理を一言でいうなら、このバレン縄の突起点を回転自在の鉄球に変えたものだという事になるが、発明の過程は逆で、実はソロバンは良く滑るという回転の原理から出発してバレンへ辿りついたのである。大いに遠廻りした訳だが、それは必ずしもムダではなかったようだ。もしバレンの改良という視点から出発したのであれば、竹の皮の加工にでも熱中して、それを捨て去る発想は遂に生まれなかったかも知れないからである。

「ツブシ」で苦労しながら、木版プレスを求めようとしなかったのは、プレスが重くて巨大であり、使わない時はやたら邪魔になるばかりと考えたことと、プレスはその構造上、刷りたい部分にだけ圧力をかけるということが不可能だと分かっていたからである。水性多色刷りで、刷る度に紙の温度を変え、圧力を変える筆者の表現法には、プレスは却って効率が悪いと思われた。また、一旦紙が余りに強い圧力を受けると、絵具によっては付きが悪くなるのである。

さて、ボールバレンが複数の人に使われるようになってから、著者の耳に入って来た意と、感想また苦情などを要約すると、

1、ツブシが非常に楽になった。
2、竹の皮が要らず、連続使用が可能。
3、方向性が無いので便利。

等が利点としてあげられ、苦情としては

1）少し重過ぎて、微妙な手応えが分からぬ。
2）球が錆びる。
3）黒いカスが溜まることがある。

等が印象に残った。1)の重過ぎるという批判は本バレンの使用に馴れた専門家に多い。ボールバレンは非常に軽い力で刷っても圧力が強いので、力を入れ過ぎないよう重々注意されたい。2)については、絶えず使っているか、使わない時は防錆紙に包んで缶か桐箱に保管すれば防げる。3)の場合は、常時ホコリの少ない場所で作業し、以下に述べる当て紙の使用を怠らなければ実害はない。

鉄球に水分が付くと滑りが悪くなり、錆の原因にもなるので、絵を刷る紙の上にもう一枚、防水性の薄紙を当てて、その上から擦るのが望ましく、これを当て紙と呼んでいる。

※刷帰Y氏の実験によると2万回位使ったあと分解して調べたが何の異常も認められなかったという。

当て紙は何んな材質が良いか、過去七年間いろいろ試してみた結果、一般的な刷りの目的にはマットビニール（伸縮のないトレーシングペーパーとして市販されている）が最も適しているようである。これは完全に防水性である上、下絵がトレースできるので、刷る紙に敵われてしまう版木の図柄を知るのにも便利である。ただ画面が大きい場合、フニャフニャして抜いにくいので、著者は竹ヒゴやバルサでつくった枠にテープで止めて使用している。美濃紙をシリコン加工して使うのも良い。最近、細線の版を刷るための当て紙として0.5ミリの硬質ビニール（張りがある）に、図柄を描いたハトロン紙を貼って使用したところ、手の感触、刷りの効果、ともに極めて良好であった。

いづれにせよ、以上述べた当て紙を使用しながら、ごくごく少量の椿油をバレンに時々こすり付けて使うというのが、ボールバレンの機能を最高に活かす方法である。

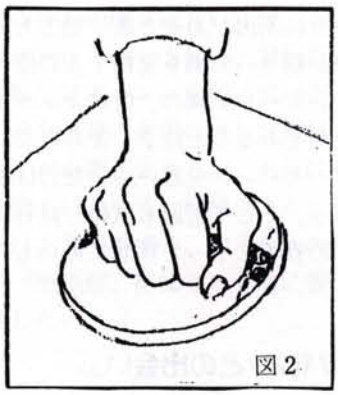


図2

▶各世代にわたる木版作家からの意見

「バレンの革命」

北岡文雄

伝統的な本バレンの勝れた性能に就いては、誰しも異論はない。水性絵具を用いる木版画の摺りには必要不可欠な道具であり、江戸時代からの木版摺り職人の経験と知恵の結晶である。

然し、竹の皮を交換する技術的な難しさや、バレン自体の価格の高価なこと、本格的に作る職人がいなくなったことなどの理由で、木版画家はそれに代るものを永い間探し求めていた。

日本国内ならまだよいが、欧米では竹の皮は全く手に入らないから、高価な本バレンも一度竹の皮が破れてしまえば廃品同然である。

私がアメリカの美術学校で木版画を教えていたとき、アメリカの学生にとってバレンは極めて魅力的な道具だが、最大の欠点は竹の皮の交換の難しさだった。油性インキならばスプーンでもプレス機でも刷れるが、水性絵具はバレンでなくては刷れない。欧米に水性絵具による木版が無いのは、紙とバレンに原因があると思ったことだった。

バレンが刷りの効果を発揮するのは、竹の皮に包まれているバレン縄の、俗にコンペイトウと言われる突起であることはよく知られている。由木さんがボールバレンを思いついたのは数年前のことだと言う。そして何回も試作し試行錯誤を重ねて、昨年の春頃にやっと理想に近いものを完成した。一番の難問はボールベアリングを回転させることと、騒音をなくすことだったという。ボールベアリングが一層のものと二層のものとあるが、二層の方が重いけれど広い色面のツブシには卓抜な効果がある。然し一般的には一層のもので充分である。

私は昨年の秋、中国の北京と重慶と杭州の美術学校で木版画の講義と実技指導をして来たが、中国の先生や学生の希望が強く、結局用意した三個のボールバレンを三ヶ所に一個ずつ置いて来てしまった。

竹の皮の交換の必要がなく、本バレンに匹敵する能力を持ち、永久的な使用に耐え、しかもリゾナブルな価格のボールバレンは、今後の木版画の普及と発展に大きな貢献をするに違いない。特に外国人にとって便利だろう。それでもデリケートな摺りの効果に不安がある人は、本バレンと併用するとよい。

私は、比較的厚く、ドーサも強い紙を使うので現在では殆んどの版をボールバレンで摺って良い効果を得ている。特に油性インキを用いた大きな版の摺りには絶対である。

私は、由木さんの画期的な発明に敬意を表すると共に、心から感謝している。

「ボールバレンとの出会い」

野村　博

由木氏からボール型バレンの試作についての話を聞いてからもう三年にもなろうか。なるほど理屈ではその有効性に疑問の余地はなかった。要は実用に耐えるものができるかどうか。由木氏は営々としてまさに試行錯誤を重ねられ、完璧な道具に仕上げられた。

由木氏の当初の目論見は『つぶし』刷りであり、木にもまた『つぶし』刷りそのものであって見れば、木に刷りに最も有効と思われたが、鋭角的に独立した線や創山様の突起面や浅彫りで細緻な線などもつぶしてしまいそうに思われてならなかった。

昨夏由木式バレンの完成品の提供を受け、そのまましまい込んであったのを昨年暮れの木口の年賀状の刷りに初めて使って見た。ところがぼくの抱いていた不要はすべて杞憂であった。

洋紙であれ和紙であれ、繊維の粗密、柔剛、長短、厚さ温度の如何を問わず刷りとれるその性能は驚嘆すべきものだった。しかも多少の生硬さはあるにしてもバレンと同様、原始的なてのひら感覚を失っていないところがいい。つまり手加減という心の領域に関わるところが大きく、飽まで道具であって機械でないところが絶妙である。

木口木版の分野でも由木式ボールバレンによっ

てつぶしは簡学に楽々と刷りとることができるようになったが、この道具の示唆する刷り技術の奥は意外に深いようだ。いろいろの試みによって、この道具が新しい表現を生むかも知れない。そんな予定に漏ちた近頃にない面白いできごとと思っている。

「ボールバレンについて」

上野　遙

このバレンは、いささか無作法者である。銀色に光る鋼球が整然と同心円を描いて、それが何とむき出しの丸裸である。バレンとは、もっと奥ゆかしいものだ。八ッコのシンの鋭い気迫は竹皮の衣に包み隠して、ねずみ小僧のゆるんだ頬かむりみたいに少々たよりない風情、これがバレンのイメージのはずだった。「これ一ケで何万円もするんだぞ」と言っても、にわかには信じ難い、つまり、能ある鷹は爪を隠す、のたとえどうりの人格者がバレンであった。

それなのに、意外と言うか、案の定と言うか、使ってみるとなかなか効く。むき出しの見かけどうりに、素直に、強い効き目で版面をすべる。

広い面のつぶし摺りや、インク摺りの転写などは驚く程楽にできる。これはバレンとは別種の、まったく新しい道具ではないか。いや、しかし点の集合で面を作り、それによって手からの圧を版面に有効に伝えて、シコシコと摺るという発想はやっぱりバレンだ。従来のバレンのデリケートなやわらかみとは別に、この新しいバレンの個性も使いこなしてみたいと思っている。

「ボールバレンと本バレンの二刀流」

木下泰嘉

初めてボールバレンに接したのは、刷りのアシスタントをしている高橋力雄氏のアトリエであった。ボールバレンは、力を入れることなく動くのだが、動いた跡が出てしまうので、その時はそのままになっていた。

その後、ボールバレンを入手したのは、第一に本バレンの場合は竹皮を包む作業が大変である事第二に本バレンほど力を入れることなく、バレンを動かすことが出来るのなら刷りも楽になると考えたからである。

現在、私の作品の刷りにおいては、大きなベタ面の版にはボールバレンを使い、線的な版や小さなベタ面の版には本バレンを使っている。

作家は、自分自身の表現に適した道具や技法を模索することが必要とされるが、それはバレンの使い方（技法）においても同様である。

ボールバレン発明までの、由木礼氏の苦労（これは、季刊『版画館』第15号に克明に書かれている）に感謝したい。

編集委員より追記

このボールバレンについての内容は編集スタッフが、制作開発者の由木礼氏をはじめ、北岡文雄氏・野村博氏・上野遙氏に原稿をお願いしました。人が道具に歩み寄り、道具を自分に引き寄せながら、創作にあたってらっしゃる方々の素直な意見を得ることができ、紙面を借りてお礼を申し上げます。

編集スタッフ一同

▶石膏刷り(plaster-printing)[1]の研究

設楽知昭

版画、とくに銅版画を紙ではなく、石膏で刷りとる（プレス機を使用せずに）方法は、1966年にS. W. HAYTERが著わした「NEW WAYS OF GRAVURE」に紹介され、またその中に、19世紀に、石膏で刷りとる方法があり、それを記述した本があったということも記されている。しかし、実際に石膏で刷るということは、紙とプレス機で行う方法と、幾分違った注意と手順が必要であるし、その原理を理解し、充分に満足のいったものにするには私個人、かなりの試行錯誤を繰返した。

ほとんどの版画が、紙に刷られるのに対して、石膏という素材は、やはり特殊な条件を持ち、造形的にも、興味のある問題を提起すると考える。

〔註〕

1)本文の内容は1985年6月、愛知県立芸術大学版画研究会の公開研究会における会報と、同年、愛知県立芸術大学紀要(No.15)に研究ノートとして記載されたもので、今回、補足事項と更に「石膏刷りの可能性と問題点」の項を付記し発表する。

石膏刷り(plaster-printing)の原理と方法

焼石膏は、水と混練すると、直ちに反応して下にあるような反応を起こす。熱を発し、水和しながら、微細な針状の結晶を無数につくり、それぞれが交錯して硬化体になる。結晶の隙間は、細かい不規則な毛細管で出来ており、硬化と同時に、急激に成長するこの毛細管は、その表面に触れる水分や、油脂分、微粒子を吸い取る。この作用を利用し、版面にあるインクを転写し定着させるのが石膏刷りである。石膏刷りは、溶いた石膏を直接版面に流し込んで硬化させ、プレスを使わず、版のありようをそのまま写しとる方法である。

$$CaSO_4 \cdot \frac{1}{2}H_2O + \frac{3}{2}H_2O$$

焼石膏(100)　水(18.5)

↓ 水和

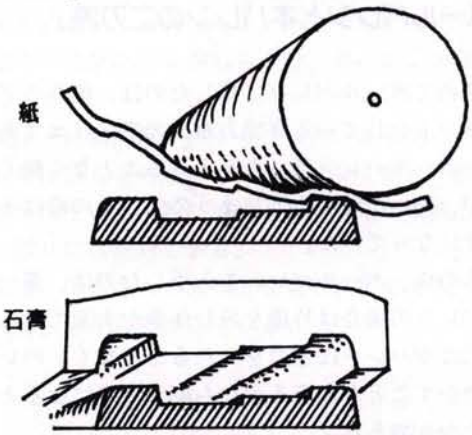
$$CaSO_4 \cdot 2H_2O + 4600cal/mol$$

石膏硬化体(118.5)　発熱

結晶

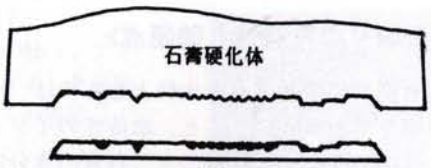
サンエス石膏㈱より

今回、提示するのは、石膏による凹版（銅版）の刷りと、さらにそれが展開した例だが、凸版、平版なども対象になり得る[1]。今までの説昨で断わる必要もないと思うが、シルクスクリーンのような版種と、石膏刷りは性質の違うものである。石膏刷りは、プレスを使用する版種と交換性を持つもので、石膏という素材自体が、プレス機の力を兼ねそなえていると考えてもよいと思う。その意味で、石膏刷りの実際を示すに、プレスの効力に負うところの多い凹版の刷りを、その例として紹介したい。また石膏刷りも、凹版においてより有効である。



〈石膏刷りの実際—凹版について〉

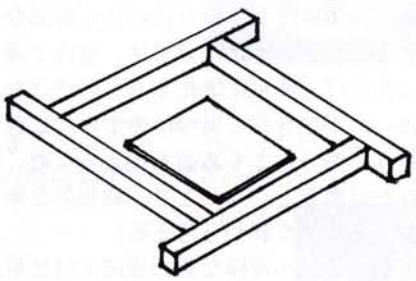
使用する版は銅の凹版である。直接法によるドライポイント・メゾチント・エングレービング、腐蝕法によるエッチング・レリーフエッチング・アクワチントなど、どんな種類の版でも可能だが、特にエングレービグン、アクワチントの刷り上がりは、紙に比べて正確で美しい凹凸の反転が見られる。また、深いレリーフは紙とかなり性格の違う刷り上がりになる。しかし、一版多色のように色を重ねた版は、プレスで圧力をかけない石膏刷りには向かない。多版多色も技法的に不可能である。石膏刷りの対象は、一版一色が原則になる。



では、石膏刷りの工程を、順を追って説明しよう。

まず、版面の凹部にインクを詰め、拭く。インクは、紙で刷るときよりも油分を多めにし、版面に残す油膜も少し残し気味にする[2]。これは、石膏が油分をかなり吸い取るためで、その分を見込んで多めにする。油分が少ないとインクの体質が弱くなり色調も落ちてしまう。

版を、ガラス板などの上にセットする。刷り上がりの形を四角くするには、あらかじめ回りに角材などで枠を作っておく。この枠は、石膏の厚さを均一にし、硬化も同時に始まるので、版に対する反応も一様になる効果がある。ただし、必ず必要なものでもなく、枠がなくても充分に刷ることが出来る。

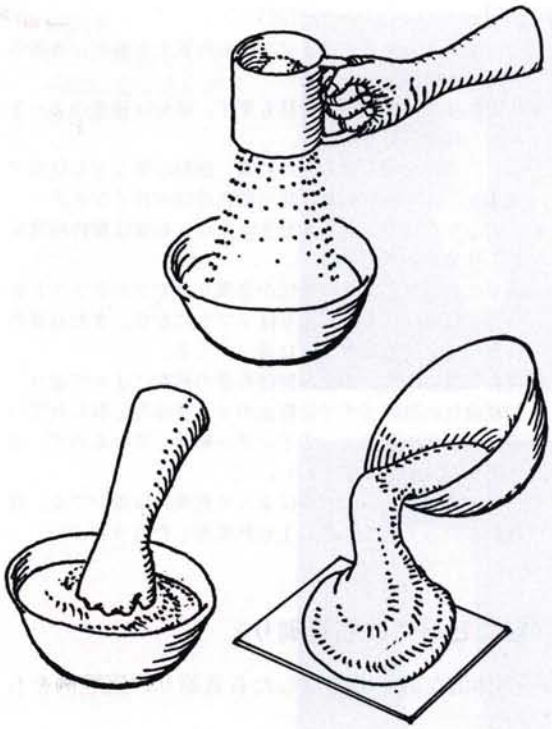


石膏を溶く。石膏は様々な種類が使用できる[3]が、良く乾燥したものを選ぶ[4]。

石膏を溶く手順は、次の通り。

- まず、ボールかダケツ（ゴム製か柔かいプラスチック製）に水を必要量いれ、石膏をふるいにかけながら少しずつ落し入れていく。
- 水面ぎりぎりになったら、2～3分放置し、沈澱が進み。表面に余分な水が出たら、それを静かに捨てる。
- 器の底をゴム槌などでたたいて気泡を出す。
- 少しして、空気を入れないように攪はんし、ある程度のかたさになったら流し込む。

これらの手順は、必要以上に混水量を増やさないことと、気泡を作らないこと、石膏を流しこむタイミングを計りやすくすることをねらって行なわれるものである。石膏刷りの刷り上がりは、水の量、流し込むタイミングの二点が大きく関係し[5]、

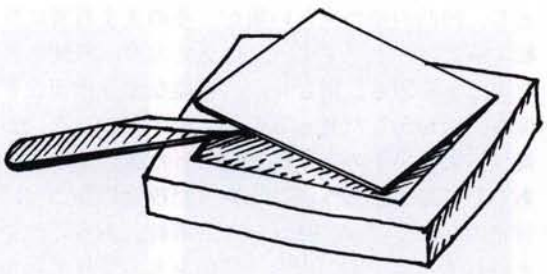


石膏の硬化が急速に強く行なわれれば、それだけ多く版面からインクを写し取っていく。そのためには、硬化くるのに必要最少の水の量と硬化の始まる直前に流し込むことが大切である。

このように石膏の状態、インク、流し込むタイミングによって、刷り上がりは変化する。石膏で刷ること自体、それほど困難なことではなく、注意深く行なえば、安定したものだと言える。石膏刷りは、刷りそのもに可能性と自由さがあり、制作者がより積極的に刷るという行為に意志を込める方法と考える。

流し終わった石膏は、熱をもちながら硬化し、やがて冷える。石膏の種類にもよるが、30～40分程度で初期硬化を完了し、その時点で版を外すことが出来る[6]。取り外しが難しいときは、ナイフの先で版を浮かし、外す。

完全な乾燥には最低2週間程度かかる。風通しの良い室内で、自然乾燥を待つ[7]。



〔註〕

1)その他、木版、モノタイプなども対象となるが、水溶性の絵具は使用できない。

2)版面の油膜は離型剤の役目も果す。油分は通常の2～3割増し程度が目安になる。

3)染料、顔料などを混入した石膏、樹脂石膏なども使用できるが、標準的な石膏に比べ硬化時間が長くなる。

4)古くなった（空気中の水分を含んだ）石膏は撹拌時間が短く作業性が悪くなる。

5)簡単に言って、石膏の硬化が急激なほどコントラストが強く、緩慢なほど刷り上りはソフトになる。また石膏の種類によっても刷り上りは違ってくる。

6)撹拌可能な時間、硬化時間は石膏の種類によって違う。初期硬化の段階ですでに版面のインクは写し取られているが、石膏の熱によってインクが軟化しているので、冷えてから外すのが望ましい。

7)石膏に含まれていた水分によって乾燥には差がでる。経験的にいって、1ヶ月以上自然乾燥したほうがよい。

〈私にとっての石膏刷り〉

…立体的な版から展開した石膏刷りの実験例をもとに

始めは、ビュラン彫りによる銅版の印象が、紙で刷ると変質してしまう気がして、石膏で刷り取る方法を選んだ。それは、金属板を直に彫っている手応えをそのまま反転してくれると思ったからで、その頃は、失敗も多かったが、次第にその原理と方法が分りはじめると、技術的な部分が、発想において優先しはじめた。これは、誤った方向である。しかし、刷るという行為に大変な興味と意味をもったという点で、石膏刷りは重要であった。

もともと版画は歴史的な発達から見ても、複数性が重要な要素であった。ともなって、複数性において版画はグラフィカルであり、刷りはその再現にあったと思う。また、紙はこれらの媒体としてふさわしい有効な素材で、版画の成立と深くかかわっていたと考える。

石膏刷りは、凹版の凹凸をそのまま反転する。それは、雄型と雌型の関係に版と石膏があると言える。凹凸の差の大きい版が、そのまま石膏に反転するとき、グラフィックな見え方が、破綻をきたすことがある。紙ならば、可能な限り平面性を保ち、版が示した見え方を写し出すところを、石膏は、実は黒子のようにしてあった版の構造を、あらわにしてしまう。こういった視覚的なことは、言葉にしにくいが、私は、この破綻、あるいは見え隠れする黒子を、大変、感動をもって見ている。

〈石膏刷りの可能性と問題点〉

石膏刷りの場合、その条件となるのは、一版一色の刷りであるということ、水溶性のインク・絵具は使用できないということ（石膏の水分によってインクが流されてしまうため）、耐アルカリの版材に限られること、版になるものと石膏が平面を含めて、雄型、雌型として成立していることなどである。

以上をかなえていれば、様々な版材がその対象になる。例えば、プレス圧を心要としないので、危弱な（例えば、ガラス、プラスチックなどの表面の彫刻など）状態の版も充分利用でき、また凹凸の強い面、あるいは立体物なども、雄型雌型の条件を満していれば版と成り得ることなど、造形的にも興味ある展開を可能にしてくれると思う。

しかし、同じ条件において問題点も多い。まず一版一色の刷りしかできないということがあり、これは大きな不満となるかもしれない。さらに、石膏それ自体の構造を保つため、大きさに合った量を必要とすることで、大きくなればなるほど非常に重く、かさばり、取り扱いにも特別な注意がいる。また、耐久性については、室内で適切な条件下にあれば、簡単に老化するものではないが、取り扱いの不便さから傷つけやすい。これらは、石膏刷りの部分のごく表面を支えるため、彫刻的な存在が必要だということで、物理的な条件ではあるが、基本的な制約と言える。

石膏刷りは、小規模な版の展開では比較的簡単に行なうことができ、プレス機を必要とせず、様々な版材が利用できるので、専門家の特殊な方法というより、ごく一般に基礎的に活用できる方法かもしれない。また、版を立体的に展開し実験しようとするとき、有効な手段と思う。

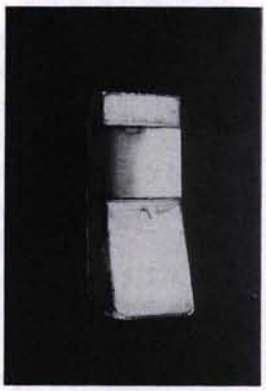
作例 1
実際の物（レディーメイド）を原版にして石膏刷り

版

石膏

作例 2
鋳型の性格をもつ原版に流し込んで石膏刷り

版



石膏

作例 3
一つの凹凸面から、凹と凸の形

作例 4
凹凸をもつ原版（銅）から凹、凸の石膏刷り

原　版

▶各大学版画研究室だより

上越教育大学　　福岡奉彦

小学校教員養成大学・大学院大学を目指し設立された上越教育大学も今年11月で10周年（設置準備期間を含）を迎えようとしている。

版画の授業は学部２年次で選択、週一回（200分）で10回、大学院は週二回（350分）で10回のカリキュラムなので基本的な技術の習得だけで授業は終了し、後は自主制作という形で自由に教室を使用して制作し、卒業制作や修了制作に向います。卒制も卒業論文と修了制作も修論との二本立で行い、学生にとってこの事は大へんな負担となっているようです。

版画実習室は約100㎡の中に腐蝕反応で発生する有害ガス及び酸の蒸気をダクトを通して屋外へ流すガラス張り（焼き付け塗装）の腐蝕室（約８㎡）が有ります。希硝酸腐蝕液、塩化第２鉄腐蝕液を常時使用し、インバーターで０～63段階の換気を仕事に応じて調節出来るようになっています。他にエッチング大型プレス機（電動）１台、中型プレス機１台、リトグラフ中型プレス機（電動）１台、小型プレス機１台、流し台も銅版画専用（シャワー付）石版画専用（シャワー付）に分れ、インク練り機（ストッパー付）、アクアチントボックス、刃物研摩機、シャーリング等有ります。室全体の溶剤の蒸気揮発換気のため大型回転扇風機５機を天井に設置し、強力換気扇２台で制作室の換気が適宜行なわれるようしています。又、デザイン実験室（75㎡）としてシルクスクリーン設備があり、真空刷り台、真空焼付機、写真製版用暗室、堅形製版カメラ、反転プリンター、写植機等設置してあります。最近らっと換気扇を取りつけた冷暗室の薬品貯蔵庫（12㎡）が出来ました。

仕事をやりたい学生にとっては24時間教室で制作を出来るのでいいのでしょうが素材研究、いろいろな展覧会の鑑賞、広い視野の中での制作となると地方のデ・メリットは避けられません。

現在３人の大学院生が中心となって教室の伝統をつくっている次第です。

東京芸術大学　　筆塚稔尚

「版画廊オープン」

本学は上野の森にあり、都美術館、銀座の画廊街にも近く、東京という特殊な都市から、あらゆる情報を得ることのできる位置にあります。しかし創作表現は、自身の内側から表出する純粋な活動であるが由に、ともすれば自分の位置する社会環境を忘れ、自己内省の世界に陥入り、受動的になってしまいます。また作品を観ることと、観せることの間には簡単には埋めることのできない意識の距離ができると思います。版画というメディアを工房という考えを用いて設明するならば、ある人数が、共有する創作現場で、お互いのプロセスを見、話し合い、時には上級生と下級生が共通の問題、技術を伝え会うことが最も可能な場であると考えます。そして、より身近な制作者とお互いの作品を理解する上で、学内での展示はより意味のあるものだと考えます。

本学では、昨年暮に版画教室の廊下を整備し、今まで、一歩間違えばゴミ箱同様だった場所を、大学側にお願いし照明設備を新たに設け、学生達でペンキ塗りをし、「版画廊」と名命した、展示スペースを作ることができました。２ｍ×12ｍ位の小さな空間ですが、学生達が自分達の環境の中で創り出した作品を一歩離れて改めて見るのには良い空間だと思います。また、他版種の学生・集中講義の学生にも、同じ空間から生まれ出た作品を身近かに観ることができるのは、画集を開くこととは、一味も二味も違うことに気付くことと思っています。

▶第12回大学版画展

小川正明

第12回大学版画展は大学版画学会主催、町田市立国際版画美術館共催により同美術館に於て12月12日より12月26日まで開催されました。

今回、会場面積が大巾に広がり参加校45校、作品数327点と前回に比べ参加校で4校、作品数で200点増えたことになります。初日総会後、出品作の審査をし49名の作品を大学版画展買上げ賞としました。各校とも出品点数が増えた訳ですが、質的なバラツキはそれほど感じられず充実した内容であったと思います。講堂での受賞者紹介後レセプションに移り、出品者、関係者が一同に会し交流を深めました。又、会期中公開制作による技法研究発表、学生代表を交えての公開討論会が開かれ好評でした。なお国際交流の一環として韓国弘益大学校より30点の作品が出品され、より意義深い展覧会となりました。

町田市立国際版画美術館はじめ御協力いただいた方々にこの誌面を拝借し深く感謝いたします。又、日本大学及び各大学関係者の努力により展覧会がスムーズに運営出来ましたことも御報告いたします。

▶ 大学版画学会会則

第1章　総　　則

第1条　本会は大学版画学会と称する。
第2条　本会は会員相互の協力により大学に於ける版画教育の進歩発展をはかることを目的とする。
第3条　本会の事務所は大学の版画研究室におく。

第2章　事　　業

第4条　本会は第2条の目的を達成するために下記の事業を行う。
1.機関紙、出版その他、研究調査に関する事業
2.研究協議会の開催
3.研究のための専門委員会または部会を設けることがある。
4.その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章　会　　員

第5条　本会は会員を以って組織する。
第6条　会員は大学に於いて版画教育にたずさわる者で入会の手続きを完了した者とする。
第7条　会員は別に定められた会費を納入しなければならない。

第4章　組織及び運営

第8条　本会の事業を運営するために次の役員をおく。
1.会　　長　　1名
2.事務局長　　1名
3.運営委員　　若干名
第9条　会長は本会を代表する。
第10条　事務局長は庶務、会計、事務を総括する。
第11条　運営委員は事業、運営の企画を執行に当る。
第12条　本会に名誉会員、相談役、顧問、賛助会員をおくことが出来る。
第13条　役員は総会において選出する、任期は2年とし再任を妨げない。
第14条　本会の会議は総会、運営委員会、専門委員会とする。
1.総会は年1回開き、本会の事業および運営に関する重要事項を審議決定する。会長は必要に応じて臨時総会を召集することが出来る。
2.専門委員会は内容に即して会長が召集し案件の作製、審議に当たる。
3.運営委員会は会長が召集し、本会運営の企画に当たる。

第5章　会　　計

第15条　本会の経費は会費及び賛助会費をもってこれにあてる。

第6章　入会、退会

第16条　入会は本学会員2名以上の推薦者を必要とする。
第17条　入会は総会の承認を得るものとする。
第18条　退会は退会届を事務局に提出、総会の承認を得なければならない。

附　　則

1.第7条による会員の会費は年額3,000円とする。
2.運営のために必要な細則は別に定める。
3.この会則は昭和49年11月3日よりこれを施行する。

▶ 名誉会員名簿

小野忠重 東京都杉並区阿佐ヶ谷北2-25-16 〒166

小磯良平 兵庫県神戸市東灘区住吉町丸山御影グランドハイツ3-411 〒658

末松正樹 東京都世田谷区奥沢2-17-22 〒158

田中忠雄 東京都東久留米市学園町1-14-34 〒180-03

平塚運一 7203 Connecticut Avenue chevy chase MD 20015 USA

福沢一郎 東京都世田谷区砧8-14-7 〒157

村井正誠 東京都世田谷区中野1-6-12 〒158

脇田　和 東京都世田谷区代田4-14-2 〒155

▶ 会員名簿

相笠昌義 座間市立野台540 〒228 TEL 0462-54-0279 多摩美大

相沢美則 杉並区久我山5-1-22 〒168 TEL 03-334-9562 文化学院

青山光祐 山形市大字七浦497 〒990-21 山形大

秋元幸茂 滋賀県大津市稲葉台13-10 〒520 TEL 0775-25-7927 滋賀大学

朝比奈逸人 池田市井口堂3-196 新加納苑103 〒560 TEL 06-853-4269 大阪教育大

朝比奈則江 静岡県焼津市浜当目1-5-28 〒425 常葉学園短大

天野純治 神奈川県三浦郡葉山町長柄1601-366 〒240-01 TEL 0468-75-8689 多摩美大

有地好登 狭山市入曽526-10 〒350-13 TEL 0429-57-8468 日本大学芸術学部

安間寛行 山口県吉敷郡小郡町大字上郷 山口芸術短大内 〒754 山口芸術短大

池田良二 武蔵村山市伊奈平5-43-3 〒190-12 TEL 0425-60-1165 武蔵野美大

稲田年行 町田市三輪町1939 岐阜大 〒194-01 TEL 044-988-3339 武蔵野美術学園

今井治男 金沢市鈴見台4-5-15 〒920-11 TEL 0762-44-5603 金沢大

伊東正悟 柏市逆井1668-99 造形大 〒270 TEL 0471-72-7830 常葉学園短大

上野秀一 埼玉県北葛飾郡庄和町大字米島1186-116 〒168 TEL 03-334-3791 文化学院

梅津　薫 北海道岩見沢市緑が丘4-221-90 〒068 TEL 01262-4-1975 北海道教育大

大塚恵子 宮城県仙台市長町2-13-21 〒982 TEL 022-258-6853 東北生活文化大

大槻紀雄 泉市加茂2-16-19 〒981-31TEL 0223-37-3610 三島学園女子大

小川正明 板橋区板橋3-26-5 女子美大 〒173 武蔵野美術学園

大原雄寛 京都市伏見区日野岡西町4-53 〒601-13 TEL 075-571-6271 成安女子短大

奥井章夫 京都市左京区下鴨下川原町47 〒606 TEL 075-791-1668 京都文京短大

奥定一孝 松山市東野5-1-19 〒790 愛媛大

小野克子 昭島市西武蔵野1388 〒196 TEL 0425-43-0891 女子美大

小作青史 世田谷区羽根木2-32-6 〒159 TEL 03-321-7221 多摩美大

小山松隆 千葉県習志野市袖ヶ浦2-6-4-506 〒275 TEL 0474-74-6586 日本大学芸術学部

大本　靖 札幌市中央区円山西町3-4-3 〒064 TEL011-611-0722 北海道教育大

岡部昌生 札幌郡広島町字西の里379-211 〒061-11 札幌大谷短大

鎌谷伸一 横浜市金沢区並木二丁目7-3-508 〒236 TEL 045-785-4703 芸大

神山泰治 那覇市首里石嶺町4-173-11 〒903 TEL 0988-85-5814 琉球大

河西万文 山梨県大月市猿橋町殿上483-1 〒409-06 TEL 05542-2-6174 都留文科大

河内成幸 多摩市桜ヶ丘4-26-33 〒192-02 TEL 0423-71-4687 福岡教育大

川西祐三郎 神戸市東灘区御影山手1-7-11 〒658 兵庫教育大、奈良教育大

加藤清美 世田谷区桜上水1-10-3 〒156 女子美大

加藤れい子 埼玉県狭山市入間川4-25-23 ハウス2008 〒350-13 TEL 0429-53-9174 女子美大

加藤茂外次 愛知県愛知郡長久手町長秋当婦嶽5ガーデンハイツ104 〒487 TEL 05616-2-5404 名古屋造形芸術短大

加山又造 横浜市鶴見区東寺尾5-3-29 〒230 TEL 045-573-6675 多摩美大

城所　祥 八王寺市本町35-6 〒192 TEL 0426-22-5857 武蔵野美術学園

清塚紀子 板橋区上板橋2-48-2-808 〒173 TEL 03-955-2300 造形大

木村秀樹 大津市比叡平3-10-5 〒520 嵯峨短大

木村繁之 国立市中1-17-1 〒186 TEL 0425-73-3025 多摩美大

小林清子 川崎市宮前区野川4090-1 野川住宅2-403 〒213 TEL 044-751-0483 女子美大

小林次男 日野市高幡566 高幡市営団地204号 〒191 TEL 0425-93-3273 東洋美術

小林基輝 埼玉県三郷市早稲田1-13-10 〒341 TEL 0489-58-2031 女子美大

黒田茂樹 横浜市金沢区六浦町303 〒236 TEL 045-781-4715 東洋美術

斎藤寿一 川崎市幸区塚越3-375 〒210 TEL 044-522-2007 和光大

佐藤行信 武蔵野市吉祥寺東町2-6-10 和光荘6号 〒180 TEL 0422-21-8992 東洋美術

酒井忠臣 福岡県宗像市田熊1254-35 〒811-34 TEL 09403-7-0728 九州産業大

笹本　純 秋田市寺内児桜281-4 児桜住宅1-406 〒011 TEL 0188-33-5261 秋田大

坂田和之 静岡県藤枝市若王子2-14-10 〒426 TEL 0546-43-5921 常葉短大

渋谷和良 福生市福生1983 アメリカンビレッジP32 〒197 TEL 0425-52-4892 芸大

設楽知昭 愛知県久手町岩作字三ヶ峰1-1 大学教員住宅4-4 〒480-11 TEL 05616-2-7447 愛知芸大

鴨　剛 大津市御陵町1-3 別所合同宿舎1011 〒520 滋賀大

▶ 会員名簿

清水昭八 小金井市梶野町4-16-27
〒184 TEL 0423-83-3733 武蔵野美大

清水　敦 札幌市豊平区月寒東4条16丁目5-2
〒004 TEL 011-851-9640 北海道女子短大

島田章三 名古屋市昭和区高峰町143-18
〒466 TEL 052-832-9385 愛知芸大

白井嘉尚 静岡市小鹿3-4-1 静大宿舎214
〒422 TEL 0542-84-4531 静岡大

白木俊之 茨城県新治郡桜村梅園2-8-13
〒305 TEL 0298-52-0710 筑波大

鈴木広行 名古屋市西区上名古屋1-5-8
〒451 TEL 052-522-0410 名古屋造形短大

園山晴己 神奈川県茅ヶ崎市下町屋2-9-59
〒253 TEL 0467-82-5097 造形大

傍嶋康博 千葉県船橋市喜野井4-8-14
〒274 TEL 0474-63-3240 都留文科大

田中　孝 大津市比叡平2-14-18 京都精華大
〒520 TEL 0775-29-0530 京都芸大

田村文雄 小平市学園西町2-12-8
〒187 TEL 0423-43-7282 女子美大

武市　勝 鳴門市里浦町粟津鳴門教育大宿舎3504
〒772 TEL 0886-86-8514 鳴門教育大

高山　登 仙台市ひより台47-8
〒980 TEL 022-243-2605 宮城教育大

滝　純一 宗像市宗像町日の里5-1-4-402
〒836 TEL 0940-36-0493 福岡教育大

滝沢光広 愛知県一宮市大和町代永1219
〒491 TEL 0586-44-3330 名古屋造形短大

為金義勝 府中市武蔵野台2-35-11 信濃荘203号
〒183 TEL 0423-25-8739 創形大

長宗我部友子 大津市比叡平3丁目42-14
〒520 TEL 0775-29-0376 成安女子短大

津地威汎 徳島市中吉野町3-11-2
〒770 TEL 0886-87-1311 鳴門教育大

永井研治 八王子市子安町1-29-1
〒192 TEL 0426-44-4476 武蔵野美大

中林忠良 埼玉県上福岡市駒林437
〒356 TEL 0492-63-1970 芸　大

柳楽節子 兵庫県神戸市長田区上池田3-11-12
〒653 TEL 078-691-8354 兵庫女子短大

西　真 京都市北区平野上柳町28-21
〒603 TEL 075-462-2258 嵯峨短大

西村正幸 大阪府八尾市太子堂1-2-1 京都芸大
〒581 TEL 0729-23-1528 明石短大

野沢博行 岡崎市明大寺町字狐塚14-2サンハイツ岡崎A-407
〒444 愛知教育大

野田哲也 柏市亀甲台2-2-4
〒277 TEL 0471-63-5332 芸　大

馬場　章 川崎市麻生区高石5-1-26 グリーンハイツ101
〒215 TEL 044-953-2932 女子美大

馬場橘男 横浜市金沢区富岡西4-7-20
〒236 TEL 045-772-1770 造形大

橋本文良 京都市北区紫竹西北町33-12
〒603 京都精華大

塙太久馬 川崎市多摩区堰42-9 武蔵野美大
〒214 TEL 044-822-8492 武蔵野美術学園

浜西勝則 秦野市千村742-15 小田急渋沢ハイツ1-508
〒259-13 TEL 0463-87-3779 東海大

原　健 世田谷区野沢3-13-17
〒154 TEL 03-421-2980 造形大

平川晋吉 宇都宮市峰町247-1
〒321 宇都宮大

広畑正剛 世田谷区赤堤3-5-2
〒156 TEL 03-324-0532 玉川大

深尾庄介 世田谷区下馬3-17-2 造形大
〒154 TEL 03-414-6034 跡見短大

深沢幸雄 千葉県市原市鶴舞308 多摩美大
〒294-04 TEL 0436-88-2034

福岡奉彦 上越市西城町1-10 西城宿舎1-203
〒943 TEL 0255-22-0807 上越教育大学

吹田文明 世田谷区砧3-33-4
〒157 TEL 03-417-7123 多摩美大

深草広平 佐賀市本庄町西寺小路884-3
〒840 TEL 0952-22-1751 佐賀大

星野美智子 杉並区善福寺1-14-10
〒167 TEL 03-390-5517 女子美大

藤岡　慎 横浜市栄区上郷町1709-19
〒247 TEL 045-894-4923 多摩美大

筆塚稔尚 所沢市上新井784-4 芸　大
〒359 TEL 0429-24-1826 武蔵野美大

古川仁史 八王寺市中野山王2-5-22
〒192 造形大

堀井英男 八王子市宇津木町940-79
〒192 TEL 0426-45-3756 創　形

前川　直 岩手県盛岡市茶畑1丁目1-6-411
〒020 岩手大

舞原克典 守山市川田町1548-13
〒524 TEL 07758-3-0028 京都芸大

松川幸寛 松本市空港東区8775-31
〒390-11 松本短大

松浦　昇 岐阜県大垣市上面二丁堤唐
〒503 大垣女子短大

松島順子 大田区田園調布4-29-25
〒145 TEL 03-721-3062 女子美大

丸山浩司 福島市上荒子1-1 上荒子住宅2-202
〒960 TEL 0245-31-4393 福島大

馬渕　聖 神奈川県茅ヶ崎市芹沢2511-2
〒253 TEL 0467-51-1497 広島大

皆川孝一 狭山市北入曽521-3
〒350-13 TEL 0429-59-2527 日本大学芸術学部

宮田克人 高知県高知市小津町10-41-532号
〒780 高知大

宮下登喜雄 府中市新町1-12 学芸大
〒183 TEL 0423-61-5634 福岡教育大

武蔵篤彦 名古屋市西区山木2-34-3
〒452 TEL 052-502-1472 名古屋芸大

村上文生 京都市右京区太秦原面影町6-1
〒616 嵯峨短大

村上善男 弘前市御幸町16-19 北奥舎
〒036 弘前大

森　俊夫 京都府綴喜郡宇治田原町大字岩山小字丸山1-40
〒610-02 京都文教短大

森　正一 静岡市西千代田町1-17
〒420 常葉大

森岡完介 名古屋市昭和区川名本町3-39
〒466 TEL 052-762-6625 名古屋造形短大

山下哲郎 福岡市東区香椎駅前3-17-21 鎧鎧坂ハイツ森407
〒813 九州産業大

山野辺義雄 町田市広袴443-10
〒194-10 TEL 0427-34-5117 東海大

▶ 会員名簿

山本富章　愛知県愛知郡長久手町岩作三ヶ峰1-1 芸大第3住宅3-5
〒480-11　TEL 05616-2-7526　愛知芸大

山本容子

山口純寛　世田谷区成城2-36-8-207
〒157　TEL 03-415-9134　芸　大

山村國晶　名古屋市守山区小幡北山2758-778
〒463　金城学院大

横田嘉雄　岐阜市日野3968-352
〒500　TEL 0582-47-6552　名古屋女子文化短期大学

吉田　東　福岡市南区大字塩原226
〒815　TEL 092-541-1431　九州芸工大

吉原英雄　大阪府高槻市塚原6-18-14
〒569　TEL 0726-96-2286　京都芸大

吉田穂高　三鷹市井ノ頭1-13-40　女子美大
〒181　TEL 0422-44-3923　日本大学芸術学部

吉本　弘　愛知県愛知郡日進岩崎元井ゲ17-97
〒470-01　TEL 05617-2-3565　愛知芸大

若生秀二　日野市旭ヶ丘1-20-19 泰山荘C-201
〒191　TEL 0425-83-0481　造形大

渡辺達正　八王子市鹿島22-1-208
〒192-03　TEL 0426-75-1655　多摩美大

若杉雅夫　愛知県西春日井郡豊山町豊場志水70
〒480-11　TEL 0568-28-3852　東海女子短大

▶ 一般会員名簿

東谷武美　埼玉県上福岡市駒林436-3
〒356　TEL 0492-63-4779

出原　司　京都市中京区姉小路堀川東入ル
〒604　TEL 075-221-5658

梅津祐司　板橋区蓮沼7-7 ハヌヌマアパルトマン
〒174　TEL 03-965-8918

梅沢和雄　大宮市植竹町1-537
〒330　TEL 0486-66-4238

太田　広　神奈川県横浜市旭区鶴ヶ峰1-28 C-21号
〒241　TEL 045-371-2561

岡部徳三　神奈川県秦野市渋沢158
〒259-13　TEL 0463-88-0743

北岡文雄　杉並区和泉2-27-8
〒168　TEL 03-328-8361

木村希八　鎌倉市山崎1350-4
〒248　TEL 0467-45-2223

久保卓治　相模原市上鶴間7-8-1-519
〒228　TEL 0427-48-7769

佐藤逸平　鎌倉市台4-13-12
〒247

高橋貴和　宮城県名取市名取ヶ丘5-1-1
〒981-12

多田益也　広島市佐伯区五日市町五月ヶ丘3-14-6
〒738-08

蹬野寿蔵　愛媛県伊予市灘町4丁目
〒799-21

長谷川光輝　藤沢市辻堂西海岸2-12-4-213
〒251　TEL 0466-33-6758

萩原英雄　中野区上高田5-33-8
〒164　TEL 03-386-0192

三木淳史　市川市平田1-13-2
〒272　TEL 0473-22-1948

▶ 一般会員名簿

山本康子　三重県四日市市堀木1-2-25-311
〒510

渡辺　満　町田市成瀬台4-26-4
〒194

若月公平　東村山市美住町2-11-1 小山マンション10E
〒189　TEL 0423-91-6407　武蔵野美大

▶ 賛助会員名簿

新日本造形　中野区新井1-42-8
〒165　TEL 03-389-1221

サクラクレパス　台東区蔵前3-20-2
〒111　TEL 03-862-3911

日本版画保存会　川崎市多摩区登戸3460 吉沢英哲方
〒214　TEL 044-911-9041

渡辺木版美術画舗　中央区銀座8-6-19
〒104　TEL 03-571-4684

山田商会　中央区八重州2-6-10
〒104　TEL 03-281-1667・8537

萩原市蔵商店　千代田区神田紺屋町43
〒101　TEL 03-256-3591

芸大画翠　台東区上野公園12-8 東京芸術大学内
〒100　TEL 03-821-7056

ぺんてる　千代田区東神田2-1-6
〒101　TEL 03-866-6161

マルチプルアートセンター（乃村工芸）　港区芝浦4-6-4 乃村工芸社
〒108　TEL 03-455-1171

ギャラリーカプセル　中央区銀座8-16-10B401 堀江強志
〒104　TEL 03-541-4676

丸の内画廊　千代田区丸の内3-2-3 富士ビル1F
〒100　TEL 03-213-8705

びけん（本店）　（移転先不明）

文房堂　千代田区神田神保町1-21
〒101　TEL 03-291-3441

日動画廊　中央区銀座5-3-16
〒104　TEL 03-571-2553

画荘ヴィナス　新宿区西新宿1-15-13 胖ビル内
〒160　TEL 03-346-2728

画篋堂　京都市下京区河原町五条上ル
〒600　TEL 075-791-6131

クラタ商店　大阪市鶴見区茨田諸口町1118
〒538　TEL 06-911-6561

酒井民雄　大垣市郭町3丁目 酒井書店
〒503

菊田商店　文京区本駒込3-8-2
〒113　TEL 03-821-7131

武蔵野美術学園　武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
〒180　TEL 0422-22-8171

シロタ画廊　中央区銀座7-10-8 高橋ビル地下1階
〒104　TEL 03-572-7971～2

養清堂画廊　中央区銀座5-5-15
〒104　TEL 03-571-2471

阿部出版版画芸術　目黒区上目黒4-30-12
〒153　TEL 03-715-2036・2046

日本オリヴィエ　新宿区本村町市谷2-6 B&Mメモリアルビル
〒162　TEL 03-267-3811

マルマン株式会社 画材部　中野区中央1-23-7
〒164　TEL 03-371-1303

（順不同）

▶ 編集後記

弱輩者が先輩諸氏の上に立って編集長を務めさせていただいて居ますが、不安の毎日でした。載せたい記事の多さと、力の不足を感じながら、やっと会報が出せたことに安堵しています。今後、伝えなければならない記事、載せたい記事を待っと共に御依頼いたしますので会員の皆様宜しくお願いいたします。

私事ですが、昨年暮に突然、福島大学の丸山先生と上越教育大の福岡先生を大学に尋ねることができました。東京で簡単に手に入る道具でも、所が変わると入手に困難をきわめること。逆に東京に居るばかりに、ちょっとした智恵、労力を働かすことを忘れがちになること等、色々と考えることが多かったと記憶しています。今後も、この会報が、活発になる様に紙面を充実させたいと願うばかりです。

（筆塚稔尚）

大学版画学会　会報17号　1988.9

編集スタッフ小川正明／為金義勝／皆川孝一／
筆塚稔尚
発　行　大学版画学会
印　刷　森印刷㈱

大学版画学会

事務局　日本大学芸術学部美術学科 版画研究室内
〒176 東京都練馬区旭丘２－42　TEL. 03－972－2111（内線238）